

# 小麦の種子はタイムカプセル

アフガニスタンという国の話を、聞かれたことがあるでしょうか。多くの人は、日本からはるか西にあり、国の中が戦争状態でテロにおびえながら食べるものもなく暮らしている、大変な国というイメージをもっているのではないのでしょうか。

しかしその繁栄の歴史は古く、私たちもどこかで聞いたことのある南アジアの国です。西遊記で知られる三蔵法師も、アフガンのヒンズークシ山脈、バミヤン、カブール川、カイバル峠を越えて天竺を目指して旅をしました。現在、反政府武装勢力タリバンと激しい戦闘が続くカンダ

## 日本と遺伝子研究 56年ぶりアフガンへ



2012年8月、収穫した里帰り小麦の脱穀風景(筆者中央)＝JICAアフガニスタン事務所の今井裕明氏撮影

ハルが、古代王国ガンダーラであったという説もありま

入することとなるアフガニ

た。国が平和に向かい人口が

原均博士(一八九三―一九八

の若手研究者とともに、すべ

供たちにバトンを渡すことが

古くからシルクロードの要

アフガンの主食は平らなパ

心に台湾の人との交流を描

本道だが、国籍も年齢も性

「一羽、二羽」と数えて食して

「一羽、二羽」と数えて食して

坂 智広



ばん・ともひろ 横浜市立大国際総合科学部、木原生物学研究所教授。1963年、名古屋市東区生まれ。岐阜大大学院農学研究科修了。農学博士。専門は植物遺伝育種学。2007年から現職。10年からSATREPSアフガニスタン小麦プロジェクトのリーダーを務める。

## 大波小波

政権が代わっても、というより新政権になってもなお外交の先が見えない。関係改善のための特使に抗議して空港で腹を切る民間人が出るほど嫌われている。あれほどの戦火を交えた独仏の現在の関係を見るにつけ、わが近隣は成熟からほど遠いと思わざるをえない。

## 近隣諸国への「路」

八方ふさがりにも見える近隣諸国との関係で、まだしも日本に優しいのは台湾くらいだろう。しかし台湾が日本のことを想うほどに

飽きずに読ませるのは吉田自身の台湾への愛着だろう。彼の地の風俗や新幹線建設の描写などに取材の深さが窺われる。新幹線は一

去る一年を表す一文字は「金」だった。メダルのためにがんばった民間人が希望を与えたように、外交はだめでも民間に活「路」があるかもしれない。今年がスポーツ以外でも外へ通ずる「路」の一年にならんことを。

(道程)

ティツィアーノ「兎の聖母」＝ルーヴル美術館蔵



「一羽、二羽」と数えて食してきた。デューラーが描いた野兎の水彩画はよく知られているが、決してベツトではなく、おそらく描いた後にこの兎を食べたにちがいない。兎は農地を荒らし、肉が食料となり、毛皮が有用であること

ダン「二匹の兎」＝レディ美術館蔵



から狩猟の格好の対象であった。西洋で静物画が成立すると、そのモチーフの多くは食材であったが、狩りの獲物としての死んだ兎がさかんに描かれるようになった。多くは逆吊りで、

## 神は細部に宿る

モチーフで読み解く美術 宮下規久朗